

### 『平井一快日記録』を読む(1)



『福岡藩士 平井一快日記録解題』(平井一快日記録研究会、篠栗町、監修・編集金成圭章)を参照しながら、『平井一快日記録』をひもといてみましょう。『須恵町誌』では福岡県立図書館所蔵の黒田家文書『平井一快日記録・上』を利用しましたが、平井家はこの草稿、控えと思われものを所蔵しています。

江戸時代中期に生きた平井一快(一七二四〜九三)は、諱(な)本名(が)一快で、通称を清次郎といいました。武士身分の者は必ず二つの名前を持っています。あまり知られていませんが坂本龍馬(通称)の諱は直柔、逆

にこちらはよく知られている方が西郷隆盛(諱)の通称は吉之助です。それぞれ坂本龍馬直柔、西郷吉之助隆盛で、まわりからは龍馬、吉之助と呼ばれていたのです。

龍馬が明治まで生き残っていたら坂本直柔として歴史に名が残ったことでしょうか。ただし、一生の間に何度か変更しています。通称は親から襲名することもありますが、諱は本人に固有の名です。

源平時代の源義朝・義経父子、あるいは徳川將軍家の初代家康・三代家光・四代家綱…のように、親から子、孫へと漢字



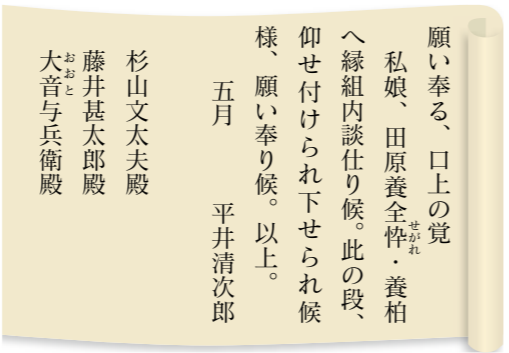
二文字の内の上の一字が代々継承されることは日本史にしばしば見る特徴です。一快は福岡藩家老久野家の第八代久野一通のひ孫に当たり、久野家から篠栗在任の平井家に養子に入りました。久野家の男性の名は「二」の字が共通します。以下、一快を通称の清次郎で表記します。平井清次郎の名は『福岡藩分限帳集成』に見えます。分限帳は、それぞれの時代の藩士の名簿です。

- A 延享分限帳 平井又七 10石4人扶持 御山目付
- B 文化分限帳 平井清次郎 13石4人扶持 篠栗
- C 天保分限帳 平井亦七 13石4人扶持

『平井一快日記録』によると、清次郎の先代亦七(又七とも)は宝暦7年(一七五七)に62歳で息子の十太夫(実は娘婿)に後を譲ります。十太夫は2年後、清次郎と改名。

したがって、ABCはそれぞれ又七→清次郎→亦七の三代が記録されていることになりま。ただし、分限帳が記録された時代は実際より少し後にずれています。

み候。同五月四日に縁談願い指し出す。



願ひ奉る、口上の覚  
私娘、田原養全<sup>せがれ</sup>・養柏へ縁組内談任り候。此の段、仰せ付けられ下せられ候様、願ひ奉り候。以上。

五月 平井清次郎

杉山文太夫殿  
藤井甚太郎殿  
大音与兵衛殿

清次郎の娘おきつと、養全の息子養柏の縁談が内々でま

りました。武士身分の者の縁組みは藩に願ひ出て公に許可を受ける必要があります。これは平井家からの願書ですが、田原家も同様のものを提出していたのでしよう。『須恵町誌』掲載の「田原眼科系図」と比較してみると、

- 四代 養柏貞宣 宝暦11年(一七六一)没
- 五代 養全貞辰 寛政元年(一七八九)没
- 六代 養柏貞誠 文政2年(一八一九)没

田原家は代々養朴・養柏・養全を襲名して、四代養柏は安永3年にはすでに死亡しています。そこから、五代養全・六代養柏の父子が『平井一快日記録』に登場する人物と確定できます。

5月28日によろやく許可が出て、清次郎の名代として同役(御山目付)の栗本次太夫が家老の野村東馬宅にお礼に行きました。月番は家老が一月交代で決

り、同年五月二十八日願ひの通り、御月番東馬殿仰せ付けられ、名代同役栗本次太夫罷り出で、御月番御宅御礼まで相済む。

6月21日に養全・養柏と、おそらくは親族の津田・原田の2人が平井家を訪問(津田武右衛門は幕末期に砲術方で有名な人物、ここではその先祖の武右衛門)。平井家親族の久野十兵衛以下の人たちが出迎えて接待しました。9月21日には逆に清次

郎以下8人(又七は清次郎の長男、長太夫は磯部長太夫で清次郎の次男十次郎が改名したものが養全宅を訪問しました。養全宅は上須恵須賀神社の下に拵がっていました。今は井戸と石垣だけが保存されています。一、同六月二十一日養全父子、津田武右衛門、原田源助、此方え参り会ひ、久野十兵衛、同善太夫、長太夫、木牧清七取り持ち出会ひ相済む。

同九月二十一日清次郎、又七、長太夫、久野十兵衛、同喜兵衛、文庵、次郎兵衛、卯兵衛、養全宅え初入り、罷り越す。

結婚は翌年4月21日。養全方で式を行なったのでしよう。清次郎と次郎兵衛は夫婦で参加しています。「披く」は今でいえば「披露宴」のことでしょうか。翌

月21日は「里披ぎ」。今の「お里帰り」のようで、この日、新婦「お橘」は実家に帰ったわけですが、夫の養柏、それに舅・姑の養全夫婦に、藤次郎という人物も同行しています。単なる里帰

りというより、結婚式に出られなかつた実家の縁者や近隣の人たちへのお披露目(披露宴)、あかさつのような意味も含まれているのかもしれませんが。文庵というのは医者か儒学者、または武士身分の隠居を思わせる名前ですが、どうい人物かはわかりません。

興味深いのは6月、9月、翌年の4月、5月と、いずれも21日で統一されていること。旧暦なので、21日は満月(15日)と新月(1日)の間に当たり、いわゆる「下弦の月」という半月(22、23日)の少し前になります。何か縁起をかついで、または伝統をかまえて21日が特に選ばれていると思われる。

一、安永四年未四月二十一日お橘婚姻相整ひ、清次郎夫婦、久野善太夫、木牧清七、文庵、次郎兵衛夫婦、卯兵衛罷り越し、夜半過ぎに何れも披く。もつとも次郎兵衛夫婦、卯兵衛、翌二十二日に披く。一、同五月二十一日里披ぎ。養全夫婦、養柏夫婦、藤次郎罷り越し、取り持ち次郎兵衛夫婦、文庵、ならびに藤助。

田原養柏の子がのぶ、九十郎(幼名)、とわ、と3人生まれたことが記録されています(次女が書かれていないので三女は第三子の意味かもしれません)。のぶは実家の清次郎方で生まれています。母と子は疱瘡(天然痘)にかかり、共に無事に乗り切りました。江戸時代の疱瘡(天然痘)はおそろしい病気で、家族がばたばたと感染し、このため幼少期に短い生涯を終えることがしばしば見られました。後に秋月藩医緒方春朔が種痘を行い、一方、長崎を通じて牛痘の考え方が導入され、福岡藩でもその効果が確かめられることになりました。これが、予防接種の始まりです。

一、同年(安永五年)八月八日 田原養柏嫡女此方にて出生、「のぶ」。

一、同六年西五月 お橘 疱瘡相仕廻。

一、同年六月 おのぶ 疱瘡相仕廻。

一、同七年戌十二月二十九日 田原養柏嫡男出生、九十郎。

一、同年(九年)十一月 養柏三女とわ出生。